

約12万年前の暖かい時代が作った地形と街の形成、そして知床半島の隆起

日本の平野の第四紀堆積物（200万年前～現在）としては、洪積層と沖積層に区分され、地形図を見ると日本全国の平野部に広く分布している。その境界は最後の氷河期が終わり、地球が温暖になり始めた約1.1万年前で、縄文海進（ピークは5,500年前）へと進み始めた時代である。ヨーロッパでは洪積層は氷河による地形も含むが、日本の平野部は氷河の影響がないので、関東平野などで見られる海成段丘面の形成時期と考えられる。

海面が上昇すると、海が平野の奥深くまで進み、山麓部を波が浸食し平坦な海食台を作る。洪積層は山麓部や台地の高い部分に堆積しており日本で観察される洪積世の段丘面としては横浜市鶴見区の下末吉を模式地とする約12万年前の「下末吉の海進」と呼ばれているのが有名である。この海進は洪積世の最後の大きな出来事にあたり、それ以前の段丘面を覆い被さって形成されているためか洪積層としては一番注目される地形である。

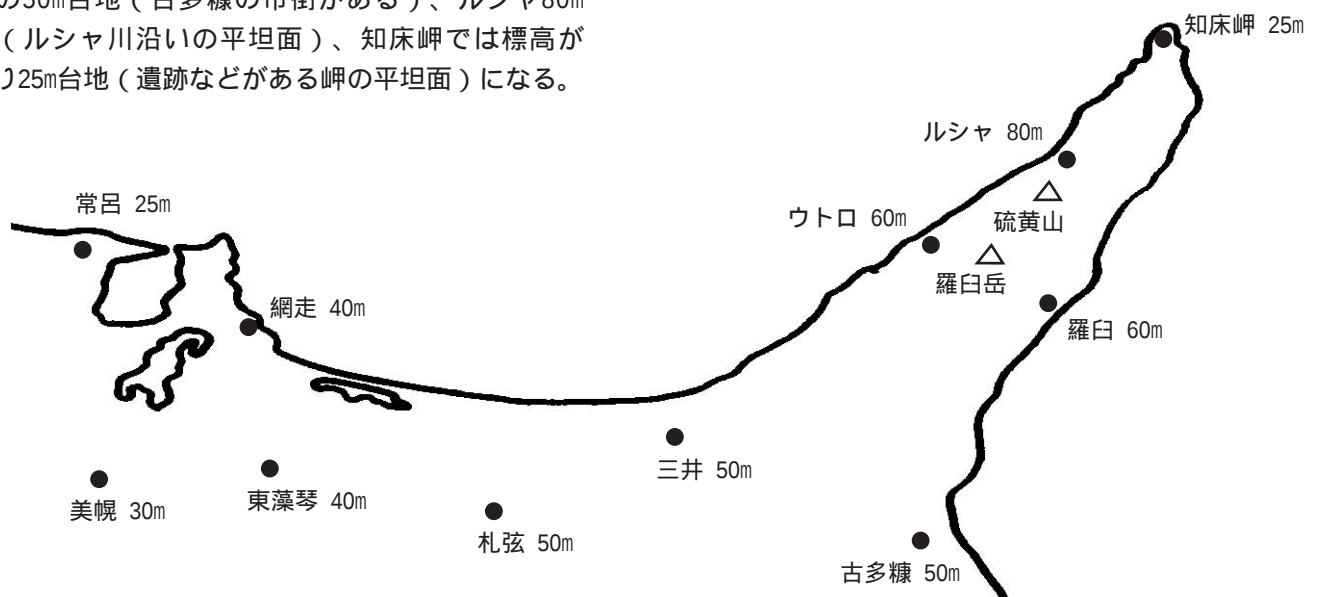
オホーツク沿岸ではこの段丘面はウトロの高台（60m）や網走の潮見（40m）がこれにあたる。斜里平野にもこの時代には平野の奥深くまで海が侵入しているが、12万年前の屈斜路火砕流と重なり現在は不明瞭な地形となっているが、ウトロと網走の中間地点と考えると50mになる。この高さはちょうど斜里平野の奥に位置する三井などの山麓部の段丘面にあたる。明かな台地状の平坦面として認められるのはウトロや網走のほか、常呂の25m台地（国道が走っている）、標津町の50m台地（古多糠の市街がある）、ルシヤ80m台地（ルシヤ川沿いの平坦面）、知床岬では標高が下がり25m台地（遺跡などがある岬の平坦面）になる。

河川上流の一番奥まった場所の平坦面（おそらく下末吉海進の平坦面）に街が作られている場合がある。例えば、東藻琴市街40m（藻琴川）、美幌市街30m（網走川）、羅臼ビジターセンターの60m平坦面（羅臼川）が認められる。

今回はおもに地図上から地形を判別したが、段丘面の堆積物についての調査と現地での標高調査を行って、台地の標高を正確に出す必要がある。しかし、知床硫黄山・羅臼岳の活火山が位置するルシヤからウトロにかけての地域が上昇量が多く（80～60m）火山から離れて西ほど低く、また古い火山である知床岳の半島先端部でも低くなる傾向が明かである。活火山の知床硫黄山から羅臼にかけては現在も地下に比重の軽いマグマがあり、隆起活動が活発なのであろう。

定量的に知床半島の隆起量を検討してみよう。高さが一番低い常呂を上昇量0と仮定すると、80mのルシヤでは12万年間に55m（80-25m）上昇したことになり、年に0.46mm/年の上昇量になる。これは日本で最も隆起量の大きい日本アルプス（地下に軽い花崗岩がある）、四国・九州の太平洋側（プレート境界のため地震のたび隆起）での1mm/年以上には及ばないが、同じような地質環境の東北地方火山地域での0.24-0.32mm/年の1.5～2倍になる。

下末吉の段丘面と街の位置との関係、それから知床半島の隆起量を推察したが、あらためて火山地域に生活していると感じた。（合地信生）



1月の大雪の後、博物館の屋根にできた氷の固まり。なかなか落ちずに玄関前を一時通行止めに。氷は落ちましたが、またつららができるかもしれません。博物館に来る際は頭上に気をつけてくださいね。

発行 斜里町立知床博物館協力会 2004.2.20
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49 斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
<http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/>